GyouseiNews.Com The Gyousei Chosa Shimbun 行政調査新聞

＜海外情勢＞

アメリカ保守派の大政治集会ＣＰＡＣにインターネットで参加

「反撃体制整えたトランプ陣営」

藤 井 厳 喜（国際政治学者）

米国保守陣営の政治的祭典である CPAC が 2 月 25 日から 28 日、フロリダ州のオーランドで開催された。CPAC は Conservative Political Action Conference の略であり、文字通り訳せば**「保守政治活動会議」**ということになる。全米保守陣営を一か所に集めての年に 1 度のお祭りである。

CPAC はレーガン大統領の頃に始まり、政治家のみならず、政治家を草の根で支える政治活動家、つまり政治に積極的に参加している人たちの集会である。トランプが大統領候補として浮上してからは、CPAC はトランプ支持派の一大イベントとなっている。筆者は昨年の CPAC には、一観客として参加した。

最終日のトランプ大統領の演説で集会が物凄く盛り上がったことを記憶している。

武漢コロナウィルス以前の状況だったので、大会場の聴衆は 1 万人を数えるほどであった。時期も丁度、昨年の 2 月下旬である。昨年の会場は例年通りワシントン郊外であった。2020 年 2 月下旬の時点では、コロナ禍はまだアメリカ東部を襲ってはおらず、会場にはマスクをした人もまったく見かけなかった。米東部でコロナ患者が急増するのは、筆者たちがアメリカから帰国した直後のことである。

さて、今回筆者は、自ら運営するオンライン・ニュース・サービスのワールド・フォーキャストのブランド名で**スポンサーの資格で参加**した。武漢コロナ禍の為、現地に赴くことは出来なかったので、インターネットを通じて、こちらのメッセージをアメリカ側に伝えることとなった。本来なら登壇して、10 分ほどのスピーチを行なう予定だったが、今回はインターネットを通じての参加となった。会場で流してもらうメッセージは、事前に日本で制作したものである。

ちなみに今回の参加に関しては、JCU（日本保守同盟）とは全く無関係に行なっている。CPAC の主催団体は ACU（米国保守同盟）である。筆者は ACU から直接、お誘いを受け、独立した存在としてスポンサー資格で参加することになった。

反撃体制を整えた米保守陣営

筆者は、インターネット中継で CPAC の様々なパネルディスカッションや講演をつぶさに見聞することが出来た。その結果言えるのは、トランプ陣営は昨年の大統領選挙の敗北から完全に立ち上がり、今や反撃体制を整えたということだ。完全に反転攻勢の構えである。2 月 28 日、最終日にトランプ前大統領が表れ、支持者を鼓舞する大演説を行なった。トランプ氏自らが新党は創らず、共和党に留まって政治活動を続ける旨を明確に宣言した。共和党内にも勿論、反トランプ派は存在する。

しかし共和党支持者の 7 割以上は、今でもトランプ氏のリーダーシップに期待しており、共和党自体がトランプ主義の方向で生まれ変わりつつある。トランプ保守派は、共和党内の反トランプ主義者を抑え込み、共和党は新しい勤労者の党として生まれ変わってゆくだろう。トランプは、共和党の大統領としては異例中の異例で、黒人やヒスパニックからの票を大量に獲得し女性票も増やしている。

昨年の選挙でも有効投票だけ数えれば、トランプが当選していたであろう。また、上院や下院の選挙でも、有権者の有効票だけを数えていれば、共和党が多数派をとっていたはずである。ところがそこに史上最大規模の不正選挙が起こり、勝利を敗北に変えられてしまった。トランプ支持者たちの怒りと絶望感は我々の想像に絶するものであった。そしてこの選挙の敗北は単に、1 党派から 1 党派への権力の移譲を意味しているものではない。今までの政権交代とは全く意味が違っているのだ。

現実に起きたことは、不正選挙という形をとった社会主義者によるクーデターである。しかもこの非合法の権力奪取の背後には、中国共産党の暗躍が存在していることは明らかである。バイデンの息子であるハンター･バイデンと、中国共産党のマネーによる結びつきや、不正投票を可能ならしめたと思われる電子投票装置とチャイナとの関係などを見れば、これはおのずと明らかである。

言い方を変えれば、昨年 11 月の不正選挙は、米国極左派による社会主義クーデターであり、同時に中国共産党によるアメリカへの間接侵略でもある。このような客観情勢を、アメリカの保守派は十分に認識している。昨年の敗北の原因は事前に投票制度を改竄されていることであった。これは州政治や地方政治のレベルで、民主党が仕掛けた謀略であった。武漢ウィルス問題を理由に、郵便投票制度を全米各地で大量導

入したことがその中心の１つである。この導入自体が州法や憲法違反でもあるのだが、それが事前には見逃されてしまったのだ。共和党側の落ち度と言えば落ち度である。そこでトランプ保守派は昨年の過ちを繰り返さない為、地方政治の原点に戻って、選挙法の改悪を許さない運動を展開している。また導入した郵便投票などを改正して本来の形に戻す運動を開始している。一方、民主党政権は、連邦政府のレベルから選挙法改悪を恒久化しようとしているのである。今後はこの選挙法改悪を巡る戦いが、アメリカ政治の大きな争点の１つになってくる。

それはともかく、トランプ陣営は地方からの選挙法改革に焦点を絞っており、運動の方針と戦略は、ほぼ確定したといってよいだろう。またこの CPAC では、全米各地から集まった保守派が相互に情報交換を行ない、人脈を作り、草の根の大きな政治運動のうねりを作り出している。共和党の政治家たちとは別次元のこの一般大衆のエネルギーが、2022 年の米中間選挙、2024 年の大統領選挙で爆発し、トランプ支持派が圧勝するのではないかと筆者は予想している。CPAC 最終日の演説で、トランプ氏は事実上 **2024 年大統領選挙への出馬**を表明した。

侍と侍の同盟を訴えた筆者のメッセージ

筆者は CPAC の中央会場で流してもらうメッセージとして、1 分間と 5 分間の 2 本のビデオを作成し、事前に事務局に送付した。筆者の抱く危機感は、読者の抱く危機感と同質のものであろう。アメリカが社会主義化してしまえば、日本は米中の挟撃に遭い、独立も自由も全てが失われてしまう。やがて皇室の伝統も途絶し、日本は中国共産党帝国の属国化、植民地化されてしまうだろう。こういった危機感から何とかして日米保守陣営の連携を強化し、アメリカの保守主義者に日本の保守主義者からの激励のメッセージを伝えたいと思った。

2 本の動画の内 1 分の動画は、筆者の自己紹介的なものである。2 本目は 5 分のメッセージビデオで、これは日本の保守からアメリカの保守への強い日米同盟締結の呼びかけとなっている。両方のビデオとも、筆者が侍の紛争をして日本刀をふるうシーンが挿入されている。侍は世界的に通じる強い日本のイメージである。

侍といえば多くの説明はいらない。礼儀正しく勇敢な日本の伝統的な戦闘者であるとのイメージが定着している。このイメージにのせて、日本の愛国者のメッセージをアメリカ保守陣営に伝えたいと思ったのである。

筆者は日米同盟を**「サムライとサムライ」**の同盟にしようと訴えた。1 分間のビデオは CPAC 開催中、1 日に数回放映された。5 分間のビデオは 2 回放映された。2 回目は、ACU のシュナイダー事務局長の紹介付きで、トランプ大統領登壇直前の絶妙な時間帯

に放映されたので、特にインパクトが大きかった。ちなみにこの 1 分の映像は、筆者の Twitter と YouTube チャンネルでみることが出来る。

CPAC参加者との対談

筆者はこの他にも、CPAC 参加者との交流を深めたいと思い、インターネットを通じて 20 人以上との対談を行なった。CPAC 会場にインタビュー用の部屋を借りて準備し、一方、日本側でも同様の体制を整えた。CPAC に参加している登壇者や一般参加者と積極的に意見交換を行なったのである。このダイアローグは非常に有益であり、筆者の目を大きく見開かせるものであった。

その場で感じたのが、既に述べたように、米保守陣営は敗北のショックから立ち上がり、既に反撃体制を整えているという事実である。2 番目は筆者のメッセージに対する彼らの反応のよさであった。筆者は彼らの思うところをインタビューするのみならず、日本の愛国者のメッセージを積極的に彼らに伝えていった。

先ず第 1 に日本人は中国共産党帝国の侵略の恐怖を日々、実感しているということ。第 2 に、中国共産党と敢然と戦ってきたトランプ大統領の人気が極めて高いこと。そして 3 番目には、トランプ大統領のリーダーシップのもとでの強いアメリカを日本の保守派はほぼ一致して支持していたこと等々である。そして自由世界と民主政治を守る為には、我々は強いアメリカの再登場を望んでおり、そう思っている日本人は多い。そしてそれは 2024 年におけるトランプ大統領復活への期待となっているというメッセージである。

またマスメディアの状況は日本もアメリカと同様で、マスコミではリベラル派のフェイクニュースが公然とまかり通っており、保守派はそれに対して我慢できない思いでいること。これなども日米共通の現象である。こういった筆者からのメッセージは、アメリカ側に大いに歓迎して受け入れられた。

アメリカのマスコミのフェイクニュースの 1 つは、「アメリカ･ファースト」を訴えたトランプ大統領のもとで、アメリカは世界的に孤立しているという嘘話である。

これが完全に嘘であり、日本では保守派の間でトランプ大統領の人気は極めて高かったことは事実である。こういった筆者の発言に今さらながらに、アメリカのトランプ支持者たちは、自信を深めたのだった。そして世界中に自分たちを応援してくれている人々が多数いることに気が付いてくれたのだ。そこで彼らは我々の送ったメッセージを大歓迎してくれたのである。

また今回の対談では、女性・黒人・ゲイのトランプ支持者とも対談することができた。これはトランプが開拓した新しい支持者グループである。そういった新しい支持者が生まれていることは、一般情報としては知っていたが、直接、そのような人達と対談することによって皮膚感覚でトランプ支持者の拡がりを実感することが出来た。確かにトランプは共和党を勤労者の政党として生まれ変わらせようとしているのだ。

また既存のメディアではない新しいメディアを立ち上げて活躍している人たちと意見交換することが出来たのも、非常に有意義だった。

例えば、RSBN（Right Side Broadcasting Network）という新興系ネットメディアが存在する。トランプ大統領の政治活動を最も包括的に報道してきたメディアだ。

このディレクター兼アンカーマンのブライアン･グレンさんとの対談も非常に活気のある楽しいものであった。またプロジェクト・ヴェリタスという潜入取材報道を専門とするメディアの広報部長のマリオ･バラバン氏との対談も非常に面白かった。

彼らは主流派マスコミや民主党幹部の隠し撮りを行ない、それを暴露する新種の調査型メディアである。最近では内部告発者を募って、大手マスコミや SNS の腐敗ぶりを暴露している。こういったかなり戦闘的なメディアだが、草の根保守の間では絶大な支持を獲得している。彼らの取材の苦労や運動の拡がりについても、話を聞くことが出来たのは非常に参考になった。

女性ではウィメン・フォー・トランプ・フロリダのリーダーであるキャロライン･ウェザリントンさんとの対談も非常にエキサイティングであった。彼女は今、「ディフェンド･フロリダ」という新しい運動を開始している。これはバイデン政権が連邦政府の権力で押し付けてくる悪法に対して、フロリダ州の自治を守るという立場から抵抗する運動である。

州権を守ることによって、連邦政府の横暴を制御してゆこうというアメリカの保守運動らしい抵抗と反撃の戦略なのである。州政府の自治権を盾に、バイデン政権の横暴な社会主義政策と戦うという運動は、全米に拡がっている。

ともかくも非常に参考にもなり、勇気づけられた 4 日間の体験であった。時差が 13 時間ある為、この間、筆者はほぼ昼夜逆転の生活を送り、アットランダムに入ってくる対談相手に対応する為に、かなり体力的には大変であったが、それは十分に達成感のある貴重な体験であった。この場で築いたコネクションの今後の発展が非常に楽しみである。改めて日本側の発信が重要であることを痛感した。